

## 実務家教員の立場から —これからの京都教育大学連合教職大学院に願うこと—

橋本京子  
(京都教育大学)

### 1. 教職大学院の役割

院生たちの個性の中にきらりと光る前向きさ、まじめさ、素直さ、学びの姿勢が、京都教育大学教職大学院に学ぶ人たちの良さである。物を見る目、多面的に見ようとする姿勢、探究しようとする心や目が素晴らしいと思っている。いろいろグループで取り組む授業が多いが、その中でより良いものをつくろうとする姿勢、切磋琢磨の姿勢があり、それは現場に行つての協働性につながる。ただ、それができたからと言って本大学院が目指している総合的人間力が身に付いたとか、高度な専門性を持つ教員になったわけではなく、そこはこれからも続く学びにかかっていると思う。それは学校現場で鍛えられたり、現場で様々な研修やまた大学院などでも学んだりすることによって育てられる。教職大学院は考え、学び、成長するということの基盤づくりになっている。これから社会全体が急激に変わっていくし、複合的な問題が様々な展開されてくので、教育に求められる、要望されるものがどんどん増えていく。その中で活躍し、教師を続けるということ自体に、素晴らしさを感じるし、エールを送りたい。そして何らかの力で支えていきたいと思う。

教員は学校で育つ、それは間違いのないことである。ただ、学校だけでは解決できない課題というのはたくさんあり、そのためにこそ高い専門性を身に付けることが必要になる。だから、学びの環境を教員にあるいは教員になっていく人たちに、しっかりと与えていく、環境整備していくことがとても大切である。そこが教職大学院の役割でもある。いろんな研修の場があるが、教員に力を与える場としての大学院の役割は、これからも続いていくものである。

### 2. これからの教員に求められる力

学部2回生の「初等教育実践基礎演習」という授業で学部生に、初任者となる時に一番つけていてほしいのは、「自分で考え行動することです」と言っている。ただ、それだけでは不十分で、これからの時代の教員に求められるのは普遍的な力、姿勢だけではなく、高度に専門的な力を育てなければいけない。それを教職大学院で身につけ、中教審答申にあるように、キャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことがとても大切である。

提案された「臨床系」に初任期ステージ、中核ステージそして、リーダーステージがあり、教職キャリアに応じたステージを教職大学院が提供することは非常に重要である。京都府教育委員会、京都市教育委員会から教員育成指標が出されているが、その教員育成指標のステージ

に応じた学びをこれからも教職大学院が提供していくということは大切である。両教育委員会の教員育成指標に基づいた内容を踏まえたカリキュラムを、教職大学院で構成することが重要である。

そして何よりこの両教育委員会の教員育成指標に述べられている基本的資質能力や教員としての素養は、本大学院が掲げている人間教師としての核になるところである。人間教師としての核とは何なのかと言われると難しいが、豊かな人間性、豊かな社会性と言われているところだろうと思う。仲間との対話、協働的な創造活動、芸術的な体験や読書、ボランティア活動などのいろんな体験や経験を踏まえて、人間教師としての核というものを耕していってほしい。これはヒドゥンカリキュラムというのか、大学院の風土だとか文化だとか言われるものかもしれないが、これを大学院の中で身につけて、ベテランになっても育んでいってほしい。

### 3. これからの教職大学院

「学校臨床力高度化系（仮）」の「初任期教員育成コース」で授業力高度化コースと生徒指導力高度化コースが一体化されるということで、大変うれしく思う。その「フェーズ1」にも「フェーズ2」にも「教科指導実践演習」というのを位置付けてもらいたい。とくに「フェーズ2」のところで、それは今の授業力高度化コースの「授業力高度化演習」に値するものであってほしい。「授業力高度化演習」は、「専門実習Ⅰ」で課題を抱えて帰ってきた院生たちが省察し、新しい自分の授業をもがきながら作っていく授業である。その演習を通して学んだ院生が、「専門実習Ⅱ」に行ったときに、非常に力をつけているということを私は実感してきた。ただ、教科が異なったりすると教科教育力の指導がどうしても十分にできない。個人の努力だけでなく、システム的に教科教育の充実が「授業力高度化演習」と結びつくことが必要である。

中核教員に対しても、やはり教科教育の充実を求めたい。また、これから学校をつくっていく核になっていく中核教員にはメンターシップ、メンター力をつけてもらいたい。リーダー教員に対しては、学校グランドデザインがつけられる教師になってほしいと願っている。カリキュラムマネジメントは当然だが、グランドデザイン、理想の学校像というものを多面的な角度からつくれる教師がリーダーになってもらいたい。

大学院の学び方や学ぶ場の柔軟性が必要である。学びたいと思っている教員は多い。ただ忙しいことも現実。だからこそ学ぶシステムを柔軟に設計して、学びのポイント制、教職キャリア高度化センターがやっているWEB講義の活用、そしてそれを基にした発展研修などをしてもらいたい。学校と教職大学院がうまく結びついて、大学院で学べるという環境が整った中で、そのポイント制を使って大学院での学びをもう少し緩やかにできるようになってほしい。

最後に、人格の陶冶が総合的人間力と高度な専門性を持つ教員にとって一番核となる部分である。そこをこれからもヒドゥンカリキュラムの中で、この教職大学院の風土として文化として醸成し続けてもらいたい。また、高度な専門性への教科指導の充実を含めて、よりよい教職大学院の内容を作ってもらいたいと願っている。